

土佐のわらべ

第414号《第436回（2016. 4. 14） 子どもの本の読書会記録》参加者7人・文書参加3人

『岸辺のヤービ』

梨木 香歩／著，小沢 さかえ／画

福音館書店

ゆっくりと進むおはなしに引き込まれ、一気に読んでしまいました。どこの国かは分からない湖沼地帯が舞台のおはなしですが、そこがまた不思議でファンタジックな雰囲気を醸し出して良かったです。ウタドリさんの語りも、淡々としているけれど安心して読むことができました。

世界観やキャラクターは詳細に作り込まれており、ヤービたちを本当にいる生きもののように感じてしまいました。ストーリーの中では脇役だったキャラクターたちにも、それぞれ深い人生があるのではないかなと思えるような細かさでした。

気になるキャラクターは、ヤービとトリカです。ヤービの子どもらしい真面目さや気遣い、キラキラした純粋さは、本当に可愛らしい。トリカには「きょげんへき」がありますが、それをトリカのくせとして、ヤービたちが理解してあげているのがいいなと思いました。

小さいヤービたちが暮らすのは、穏やかで、悪い人がいないような優しい世界。けれども、ただ皆が能天気には生きていてではなく、少し暗い、微妙な問題を抱えている者たちもいます。生き物を食べることができなくなったセジロや、母親が

「さくらん」してしまったトリカ。環境の変化で家業が立ち行かなくなり、「今年が正念場」とつぶやくトリカのおじさん。それぞれが色々な苦悩や不幸を抱きながら、一つの世界のなかでうまく調和しながら生きていこうと頑張っている姿が印象的でした。

読書会の中では、「キャラクターの設定が細かかったり、世界観の解説が多かったりするの、リアリティを感じさせるためか、それとも次回への伏線か？」という意見が出ていて、続編を期待する声も多くありました。もし第2巻があるとしたら、ウタドリさんの生徒たちとヤービ一家の交流も見てみたいところです。

この本を通して読んで感じたのは、全ての登場人物が、日々の暮らしや時間を大事に大事にしているのだろうな、ということ。皆が人生に真剣だけれども、がつつ、せかせかせせず、自然の中での自分の役割を全うするために暮らしていくところが素敵でした。

(H.S)